



投稿

杉原賢一

海は荒海 向こうは佐渡よ

― 田中町で過ごした十年間 ―

(11月号よりの続き)

三. 真美幼稚園とさくよばあちゃん

幼稚園は「新潟真美幼稚園」(新潟市西堀の真宗寺境内)。担任の高橋先生は若くて背が高く、映画にでも出てきそうな美人で、優しく皆を平等に可愛がってくれた。

普段はピアノを弾いて歌を歌わせてくれた。冬には雪の積もった園庭で、皆で雪だるまを作って遊んだ。高橋先生は園児達から慕われていたが、誰よりも好きだった。

この幼稚園には、田中町の前に住んでいた「山の下」(地名としては、「藤見町」) 亡くなった父が、応募して採用されたのだといつも自慢していた)より転居した五歳の途中から卒園までの、ほぼ一年前後を二人で通った。

家の近くに住んでいた「ともこちゃん」が毎朝迎えに来てくれて、手をつないで通園した。(残念ながら、卒園後は各々違う小学校へ進学することになり、音信無し)

行き帰りの途中で、いつしか西堀の伯母の家に同居していた、祖母の「さくよばあちゃん」の所に顔を出すことになり、よくお菓子をもらったりした。

「マー公は、辛いおせんべいと甘いおまんじゅうと、どっちがいいのかな？」

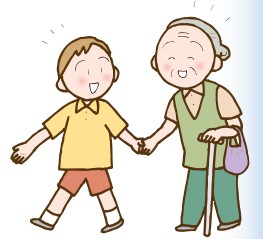
「おせんべいがいい！」というところ

「おう、おう、マー公は大きくなったからお酒のみになるのかなあ」と目を細めながら、頭をなでてくれた。(賢一と書いてマサカズと読むので「マー公」といわれた)

さくよばあちゃんは、その後何らかの事情があつて、我が家に同居することになる。五年生の頃の一年間だけだったが。

おばあちゃんは山形県で生まれ、東京北区にあつた祖父の家にお手伝いとして入り、先妻の死後に後添いとなり父を産んだ。

太平洋戦争で東京が空襲で焼け野原になると、着の身着のまま娘(伯母)の連れ合いの郷里の新潟へ疎開して、そのまま住み着くことになる。



父も戦後、中国より日本へ帰還するも北区の家は焼けて無く、母親・姉・妹を頼って新潟へ合流し永住することに。
おばあちゃんの思い出は、いくつか数えられる。

① キセルで煙草を吸っていたが、吸い終わると灰落としの竹筒にキセルの先を「コン」と打ち付け、「ブスツ」と吹く。この仕草が珍しく、また面白くて見入ったものだった。
② 「マー公、足の上にあがっておくれ」。うつ伏せになった足の裏に上がる。

「おう、おう、マー公の足は柔らかくて気持ちいいなあ」と言つては、ひとしきりおわると、十円玉を一つくれた。

長々と祖母のことを書いたが、祖父と祖母の思い出は、さくよさんしかない。父方の祖父と母方の祖父は、両親が十代の頃に亡くなっており、写真の顔しか知らない。

母方の祖母も、赤ん坊の時に亡くなっているため記憶にない。

さくよさんは、五年生の十二月に母と銭湯に行った帰りに倒れ、帰らぬ人となっている。(享年七十四歳)

10月1日付でご投稿いただいた杉原さんの原稿は、青春時代の思い出を右のように綴っていきまふ。続きは、ぜひ当社ホームページにてお読みください。サイト内「読者投稿」欄に掲載しています。

海は荒海 向こうは佐渡よ

― 田中町で過ごした十年間 ―

- 一. 日和山浜と田中町
 - 二. 大学生とおにぎり
 - 三. 真美幼稚園とさくよばあちゃん
 - 四. 長屋だったボクの家
 - 五. 少年時代の遊びと習い事、趣味の世界
 - 六. 小二の耳の手術
 - 七. 石のつぶてでガラスは割れる
 - 八. いじめっ子は、いつの世にも
 - 九. 憧れの人が、すぐそこに
 - 十. 母校 大畑小学校
 - 十一. 「大将」との交流
 - 十二. 大畑小の先生達
-それから十数年経って、小中学生の時には考えもしなかった教師の道に、いつしか自分が進むことになったのには、この先生の教育実践の有り様が深く関わっていたと思わずにはいられない。
- 田中町 昭和の匂いに包まれた
心の故郷 浜風の街
- 平成三十年十月一日(月)